

東福門院
和子の涙

宮尾
登美子

東福門院
和子の涙

宮尾
登美子
Miyao Tohiko

講談社

とうふくもんいんまさこ なみだ
東福門院和子の涙

一九九三年四月一三日 第一刷発行
一九九三年七月二三日 第六刷発行

著者——みやお とみこ
宮尾登美子

© Tomiko Miyao 1993, Printed in Japan



発行者——**野間佐和子**

発行所——**株式会社講談社**

東京都文京区音羽二―一二―二一 郵便番号 一一二―〇一
電話

文芸図書第一出版部(〇三)五三九五―三三〇四

書籍第一販売部(〇三)五三九五―三六二二
書籍製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所——**株式会社精興社** 製本所——**株式会社黒岩大光堂**

定価はカバーに表示してあります

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛に願います。

目次
:
:
:
:
:

母君お江与の方	175
お身内ご大切	143
伽羅の香のご誕辰	109
禁中事情	75
手すさびの押絵	41
愛染明王	7

入内……………207

雪の御賀……………243

左近の桜……………275

観菊の宴……………309

女帝即位……………343

紅絹^{もみ}の涙……………381

ご来迎の光景……………407

菊地信義 装幀・本文レイアウト

東福門院和子の涙

母君お江戸の方

人間のさいわいと徳、いえ、女子おなごのしあわせと申上げたほうがよろしゅうござりましょ
うか、これはひとそれぞれなれど、世に私みづかほどの冥加みょうかを得た者はふたりと指折ることはで
きぬのではありますまいか。

何ゆえかと申しますれば、ただいまは延宝八年、庚申の年廻りにて、長い戦乱の世も治
まり、天子さまは第百十二代、靈元天皇れいげんの御代となられ、將軍さまは第五代綱吉つなよしさまにご
勅諭下りましたところにござります。

かくなる時代、將軍家にお仕え申せしお女中方のうち、生涯かけてその勤めを全うせし
者、めつたとあるまじく、しかもおん主あるじ、東福門院和子姫とうふくもんいんまきこの崩御ほうぎよの際まで見極めさせて頂
きましたばかりか、法皇みづの後水尾院おのおかくれのときにもめぐり遇うという運を賜わり、そし
て皇女朱宮あけさまご落飾りんききのち林丘寺へお入り遊ばした報にも接し、これにて何ひとつ思い
残すこと無し、というただいまの心持にてござります。

私、本年とつて七十八歳と相成ります。

昨年春頃より目の前に常に白雲たなびきて視力落ち、どうやらそこひらしく思われますものの、いうなれば年病い、他にはこれというて体に悪しき個所も見当りませぬ故に、甘んじてこの成りゆきを受け入れるべく心得おります。

その代り、こしかたの記憶すこしずつ冴えて参り、いずれ私も冥界より和子姫さまお呼び下されるその日まで、胸にとどめおくことすべて打明け申上げたく、かくお運び頂きましてござります。

ここは、和子姫のお眠り遊ばす御寺みでらの東山の麓、私の小さな庵にて、誰にお気兼ねも要りませぬ。

お手をわずらわせますなれど、その灯心をいま少々お掻き立て下さりませぬか。かたじけのうござります。どうやらほんやりと明あうなつて参りました。私のそこひの目にて、虹の向うに和子姫のお立ち遊ばしておいでのご様子がはっきりと拝まれます。お小さいころの振分髪にござります。

何ゆえか、私の目裏まなうらに在わす和子姫はいつとてもお小さい折のお姿ばかり、それと申しますのも、私が初めて江戸城西の丸に上りましたは慶長十九年、姫さまお八つの年、私十二の四月ついたちでござりました。

ご奉公のご縁と申しますのは、父、將軍家医官、今大路道三、その道にいきさかの功ありとされ、御所さま秀忠さまより短刀賜わりし折、

「女子あらば、取立ててつかわそうほどこに」

と仰せられしがもとにござります。

かくてご奉公の道ひらけ、その後は生涯の大半を和子姫のもとで京の御所住いをいたしましたなれど、徳川家へのご恩浅からず、いまだに東照宮さまはじめご歴代將軍さま並びに御台所さまのおん位牌を仏間に安置し、朝夕の礼拝怠りなく相勤めおります。

よって少々くどうはござりましようが、和子姫ゆかりのおん方々のお話から申上げたく、まずおん父君の秀忠さまは、ご承知の如く、亡き大御所、家康さまご三男にて在わし、ご性質まことに温順、有難き徳具わりしお方にてあらせられます。

家康さまは、あえなく亡びし太閤さまとは諸事異なり、一族ご繁栄に恵まれしお方にて、お子さまはご成人遊ばされた方々でおん十六名の多きに上ります。このことまず、今日將軍家ご発展の大きないしずえとなりましたは、万民の認むるところでござりましよう。

これも太閤さまと較ぶれば雲泥の差と申せましようが、しかしいかに子宝に恵まれようと、親として子の先ゆき安堵いたしませいでば枝葉の茂る道理もござりませぬ。

家康さまは合戦上手、外交巧者の他にご一族に対する眼力もまことに正しく、おん子それぞれ適材適所に配置なされた、その内政のお腕前も大したものにござりました。

お子たちのなかで、秀忠さまを選びすぐり遊ばされましたは、むろんご本人さまのご運もござりましようが、やはり最後には武家の棟梁としてのご器量をお見通し遊ばした故に他ならぬものと私は存じ上げております。

ご長男は信康^{のぶやす}さま、このお方のお腹はご正室築山^{つきやま}どのにて、おん室徳姫と母君の不和がもとで義父信長さまから武田勝頼どのへの通謀の疑いをかけられ、遠江二俣城において切腹を命じられたのでござりました。

この年大御所さまは、築山どのと信康さまとを同時に我が手同然にて殺す羽目に立至り、いかばかりのお苦しみでござりましたことやら。

最初から不仲と伝えられし築山どののはさておき、戦乱の世、男子こそお家の宝とされるときにありて、ご長男を亡きものにせし悔いはおそらく一生涯、家康さまのみ心をうずかせたであらうことは容易に拝察されるのでござります。

信康さまは家康さまおん十七歳のときもうけられしお方にござりますが、その後久しく男子には恵まれず、ようやく三十二歳のときご次男結城秀康さま、側室^{まん}お万の方さまを母君として誕生遊ばされました。

そのあと五年後に秀忠さま、つづいて忠吉さま、信吉さま、忠輝さま、そしてともに六歳にて早世遊ばされた松千代さま仙千代さま、と恵まれるのでござります。

このあと少々離れ、のちにご三家を打立て遊ばされた義直さま頼宣さま頼房さまがご出生になり、その次またお二方、と見るのでござりますが、のちのちご家来衆の申されるところ、徳川家は男子出

生のたび、力をつけ大きくなって参りましたとやら、まことこれはうなずけることにござります。

といたしますれば、家の内外ともに次なる大将君氣になるところ、このお十三名のご男子は皆側室方のお腹にて、表には見せずとも、それぞれ胸のうちにてはご継嗣へのご祈願必至のおもむきだったのではござりますまいか。

大御所さまはご生涯に二妻十六妾と聞えましたれど、時代によりて入れ替りましたる故、つねには五、六名のお方さまがお仕え申上げていたご様子にござります。

奥には以前より側室三人衆といわれ、とくに大御所さまの寵を得た方々がおいでになりましたが、このお方さま方はむろん容色優れたる他に、どなたさまも才氣をお持ちになり、ご寢所に侍る以外にも、それぞれ大御所さまご政治向きのお役にもお立ち遊ばした様子にござります。

この辺り大御所さまのおん人づかいの巧みさと申上げましょうか、なかでも和子姫入内じゆだいの際、大任果されし阿茶局あちやぐわねさまも、もとはといえはこのうちのおひとり、世に「出頭のひと」といわれたほどのお方にござります。いずれこのことはのちほど、詳しくお話をばいたしましょう。

で、大御所さまは継嗣争いの愚を避けるために早くからお心づもり遊ばされていたものと拝察され、先ずご次男秀康さま十一歳のとき、小牧長久手の戦いのあと、秀吉さまのご養子にお出しになり、その後はさらに十七歳で下総結城家のご養子に移されました。

順序から申さば、信康さま亡きあととは秀康さまがご兄弟方の長、当然大御所さまの跡目、と考えていた向きもござりましょうし、よしんばご養子にお出しなされようとそれはお人質の戦略、いずれはお呼び戻し遊ばすはず、と見ていたご家来衆もおいでなれど、大御所さまはご四男忠吉さまを東条の

松平家に、ご五男信吉さまを下総小金にとつぎつぎ封ぜられ、そしてずっとお手許にお置き遊ばした秀忠さまに慶長十年、將軍職を譲られたのでござります。

大御所さまは長きにわたってお子さま方それぞれのご氣質をきつと見極め、戦乱の世去り、これからの平和の時代を統べるのは性温厚の秀忠さまをさしおいて他になし、と思召しだったのでござりましょう。

それにいまひとつ、そのころはすでに御台所^{えよ}お江^えの方さまもつぎつぎとお子に恵まれ、男子^{たけち}竹千代さまのご出生もごらん遊ばしましたれば、かくなれば徳川家盤石、と大御所さまお見届け遊ばした上のこととお察し申上げております。

そして英邁のほまれ高き九、十、十一男のお三方^{かた}をご三家に配し、三方より兄將軍を支えるかたちをととのえられましたのも、大御所さまの深きご配慮と申すべきでござりましょう。

かくして徳川幕府は極めて平安のうちにすでにおん五代を数うるに至りましたなれど、ここに至るまでの大御所さま並びにご一族の方々、そしてご家来衆のご労苦はいかばかりかと思われるのでござります。

またご男子もさることながら、そのかげで女子たちがどれほどの苦しみを嘗めさせられしことや、これはとうてい申し尽せぬほどのものがあろうやに察せられます。

例えば、私がいまからお話申上げます後水尾さまの中宮、東福門院和子姫のご生涯は、亡きあとどなたさまにても「欠くるところなき福運に恵まれしお方であつた」などと申されますなれども、私はいまだに決してさようには考えられませぬ。

金銀財宝については不足なきお暮しではござりましたなれど、おん年十四歳の入内より七十二歳の崩御まで六十年近き歲月のあいだ、心よりお笑い遊ばした日はなかったもの、と私はかげながらお察し申上げております。

女子は、戦国の世のならいにて、婚姻をかすがいの手段として用いられためしもあるものの、これは武家と武家とのあいだでのこと、和子姫の如く、將軍とは申せ、弓矢の家から朝廷に上りお後の座に就きし例など、歴史始まって以来の出来事にござります。

のみならず、皇子皇女をつぎつぎとお挙げ遊ばし、遂にはおん腹の一の宮、女帝に即位という、女子の身の能う限りの位をお極めになられました。

まことにこの上なきご順調のなりゆきと申すべきにござりましょう。しかしながら、これも和子姫のよきお心ばえなくば成り難きことであつたかも知れませぬ。

ご氣質極めて我慢強きおん方にて、おそばの私ども、感じ入つたることいくたびか、どうやらこれは父君母君のご両所より受け継がれたお血筋とお見受けいたします。

母君のお江戸の方さまに私、はじめてお目通り叶いましたのは、ご奉公に上りました翌日のことではござりました。

大奥入りにつきましては、まず願ひ親から願ひを出し、何月何日お吟味と申す沙汰を待つて御殿に上り、お広座敷でお年寄にお目見えをいたし、奉書二つ折に所定の願ひの文言をしたためて差出し、そのあと五十日ほどの身許調べののちようやく召出されるのでござりますが、さきに申し上げました如く、私の場合は上さま直々の仰せとあつて諸事略してすぐにお召しを頂きました。